

問題・解答 用紙番号	13
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

アイドルとは、一方では、光り輝く存在として注目や賞賛の的となり、憧れや羨望の対象として人々から追いつめられる記号である。だがその一方で、性的消費や性の商品化という観点に立てば、アイドルが性的身体とみなされ暴力的に消費される対象であることは明白だ。つまりアイドルとは、（ 1 ）をもって対象化され、受動化された記号にはかならない。

香山リカと北原みのりによる対談集『フェミニストとオタクはなぜ相性が悪いのか』のタイトルが象徴しているように、アイドルを情熱的に肯定する立場と、女性身体^①をコンジェン的に損なうものと認識する立場とでは、議論がかみあいにくい。フェミニズムのなかには、「性の商品化」がはらむ暴力について多くの研究^②のチクセキがあり、性的消費が女性にダメージを被らせる構造をもつことに疑いの余地はない。だが、その視点をとるかぎり、「性の商品化」の「現場」がもつ魅力を論じることができないという反論も成り立つ。したがって、アイドル論のなかでは、フェミニズムからの批判ははじめから遠ざけられるか、一理はあるかもしれないがアイドル文化の核心とは次元の異なる議論^③のだと、ゲンキエウ^④だけされて退けられる傾向にある。

そのすれちがいをネットウ^⑤におきつつ、アイドル論の主流をなしている女性アイドルに注目し、ジェンダー論やフェミニズムの観点をもちながら、アイドル論にできる限り歩み寄って言説の論理を分析し、アイドルとナショナリズムのケツセツ点^⑥を明らかにしていきたい。アイドル論をナショナリズムの観点から検証していくことで、「アイドル」を主人公とする物語は、新たな風景として立ち現われてくるだろう。

アイドル論の多くが、^A現在のアイドル文化の骨格に「地下アイドル」があるという認識を共有し

ている。まずは、アイドル論に寄り添いながら、アイドルの存在様式を構造的に変化させた「地下アイドル」が出現した時代的な流れ、そして日本型アイドルの特徴を追いかけて、アイドルをめぐる物語を構成する要素を確認していこう。

地下アイドルは、プリアイドル、インディーズアイドル、ライブアイドルとも重なる存在で、一九九〇年代にアイドルの活動の場が失われていった、いわゆる「アイドル冬の時代」を経て、二〇〇〇年代に登場した新しいアイドルの形式だといわれている。小規模なライブ活動を中心にし、SNSを有効に活用した発信を行なうスタイルが、テレビを活動の場とする「地上」のアイドルとは異なることから、侮蔑的なニュアンスで「地下アイドル」という呼び名がついたとも説明されるが、代表的なライブハウスが地下にあったことに由来するという説もある。また、地下アイドルのライブでの、ファンの応援の衝撃的な激しさから、「現場の異常性」を特徴とする「新しいカルチャー」という位置づけもなされる。二〇一〇年代には、秋元康のプロデュースしたAKB48が社会現象となるが、専用の劇場を作り、握手会や写真撮影を行なう「会いに行けるアイドル」というコンセプトは、実のところ、地下アイドルの文化を取り入れたものだとも指摘され、逆にAKBの成功が、地下アイドル文化を活性化し、「アイドル戦国時代」といわれる状況を生みだしていった。現在のアイドル文化それ自体に、地下アイドルのもった戦略や構造が吸収されているというわけだ。

さて、重要なのは、地下アイドルを経由することによって、アイドルが（ 2 ）ではなく、なりたいという欲求があれば誰でもなれるものに変化し、「ふつうの女の子」がアイドルになれる時代が現われたということである。

地下アイドルの仕事は（中略）、人前で歌って踊るとは言ってもかなり経験不問なもので、極端な話のようですが大袈裟でなく、人前でライブをして地下アイドルを自称すれば、本当に地下アイドルになれてしまいます。（中略）

なんだかアルバイト募集みたいな文章になってしまいましたが、つまりそれだけ簡単に誰でも（地下と言えど）アイドルになれる時代になったのです。

（姫乃たま『職業としての地下アイドル』朝日新書、二〇一七年、七五頁）

ライブハウスで行なわれるステージには何組ものアイドルが出演するし、新人やファンの少ないアイドルを好んで応援するファンもいるため、垣根は低く、手軽さがある。現代では、誰でも簡単に、名乗ることでアイドルになれる。アルバイトやクラブ活動と同じような感覚で、若い女性であれば、誰もがアイドルの活動をはじめられる状況が生じている。すなわち、子どもも含む若い世代の女性たちの視界のなかには、アイドルになりたいという欲望が標準となった世界が広がっているのだ。

このようにして、従来型アイドルの延長線上に、地下アイドルをめぐる構造が継ぎ足され、^Bアイドルをめぐる磁場は更新されていった。その特徴は、以下の三点から説明づけられるだろう。

第一に、未熟さや素人性が肯定され、成長の過程にあることが強調されるという点が挙げられる。日本型のアイドルは、韓国やアメリカの完成されたアイドルやポップスターとは異なり、素人とプロの中間的存在で、素人性や未熟さこそが売りになるという特徴がある、という指摘は数多い。素人性が許容され、むしろ賞揚されるという特徴は、「地下アイドル」の出現によってより鮮明化したともいえるだろう。才能や容姿は問われず、「ふつうの女の子」のアイドルになりたいという欲望を妨げない。 ア

未熟、素人性という特性は、ファンがアイドルを見守り、育て、一緒に成長していく「参加型のアイドル消費」と密接に関連している。また、アイドルという形態が成長の過程そのものだと強調される際に、将来の夢をもちながらアイドルとして活動する期間は通過点であり、「モラトリアム」と位置づけられる。「卒業」というシステムに象徴されるように、一定期間アイドルとして活動したあとに、女優やアナウンサー、モデルといったキャリアを目指す図式があり、また、アイドルを終えたその後の人生をめぐるドラマも構成されている。つねに未来を志向する力が働き、卒業自体も「プロセス」であり、「スタート」であるという解釈がなされるのである。 イ

第二に、ファンとアイドルの間の擬似恋愛関係性に、ファンがアイドルの成長を「見守る」視点が節合されていく点がある。アイドルのいわゆる「恋愛禁止」は、基本的には、ファンがアイドルを擬似恋愛の対象としていることを理由にしたルールだといえるだろう。ただし、アイドルを応援し、「推す」ことは、恋愛感情だけに還元されるわけではなく、子どもの成長を見守る親心に近い、擬似的な家族愛を内包するということがしばしば強調される。アイドル自身がファンを「ファミリー」「家族だけど家族以上」と語ったり、「夢を追う仲間」と位置づけることも多い。

第三に、「現場」と呼ばれるアイドルのライブやイベントでは、身体的な近接性を媒介とした、相互的な共同性がわかちもたれるという点がある。アイドルとファンの間には、お互いの承認欲求を満たし合う居場所を共有しているという感覚から共同意識が育まれていく。地下アイドルのライブステージは観客との距離が近く、またステージ後の「物販」や「握手会」が、ファンとアイドルの接触する場所となる。ライブでは、ファンはアイドルから「レス」と呼ばれる反応を返してもらったり、名前を覚えてもらい識別される、「認知」といわれる承認を与えられたりする。「現場」に一緒にいることで、応援するファンとアイドルとは、お互いの承認欲求を満たしあい、さらにファン同士の交流も派生し、仲間意識をもつことになる。とくに地下アイドルの場合、身体と身体との距離の近さ、近接的な身体性こそが大きな特徴となり、身体性を媒介に、擬似恋愛の感触を含みながらも、共同体的な感覚がわかちもたれていくというわけである。 ウ

地下アイドルを経由した現代のアイドルは、この近接性ゆえに、生身の身体やプライベートな

「私」がコンテンツとして売り買いされる構造のなかに置かれることになった。SNSでのやりとりや動画の生中継などを通じて、公的空間のなかにはみ出してくる「私」の生身の身体や自意識と似たものが、アイドルの「素顔」として、消費の対象にされる。つまり、演出が介在しない舞台裏や生の素顔をエンターテインメントとして見せる、いわゆるリアリティショーの手法をとって、アイドルのプライベートな部分が消費されていくということだ。

香月孝史は、そもそも、日本のアイドル文化のなかには「操り人形」から逸脱した部分を享受するという構造があったと指摘しつつ、アイドル当人たちの「自意識」や「パーソナリティ」が消費される「現場」について素描している。

特定のマスメディアの制御が介在しない「現場」は、アイドルの「生の姿」をそのまま享受できる場として受け止められやすい。また、その場で生起する出来事をアイドルとファンが共有するため、「現場」は、ファンがその現象に介入し作用することが可能で、双方向的な場と考えられている。(香月孝史『「アイドル」の読み方』青弓社、二〇一四年、一四〇頁)

現在のアイドルというジャンル全般が備えた、送り手と受け手の往還運動からは、「共有」「双方向性」が生みだされる。舞台上のアイドルと観客とは未分化で、送り手と受け手が相同性をもって共同演出できる。

エ

「サクセスの道をメンバーと一緒に歩きたい」、成長するアイドルと「一緒に駆け上がっていく感じを並走できているのは、すごく気持ちがいい」といったファンの実感は、お互いがお互いを承認しあっているという双方向性の構造から導かれたものだといえるだろう。

では、そうした双方向的なコミュニケーションの場で実践される物語とは、どのようなものなのだろうか。端的に言えば、それは「敵」が設定された、競争と闘争の物語にはかならない。

資本主義的な構造のもとにあるアイドルが、比較にさらされ、競い合わされていることに疑問の余地はない。^{*}さやわか^{*}は、一九九〇年代まではこの競い合う闘争的イメージは「公然の秘密」としてひた隠しにされていたが、リアリティショーの手法が主流化することで、その「裏側」こそがアイドルの見どころとなっていくと指摘している。「アイドル戦国時代」を背景に、闘争のイメージはバリエーションをもちながら展開されてきた。アイドル同士が競い合うだけでなく、運営スタッフとの戦いという設定もあれば、成功をつかみ取る困難との戦いという抽象化されたコンセプトということもありうる。アイドルグループの場合には、グループで「チーム」として戦い、グループ内部ではメンバー同士が戦うという二重構造になる。

オ

この闘争の風景は、ナショナリズムが召喚する、国民国家の境界線によって敵と味方に二元化された、実際の戦争のイメージとシンクロせずにはいないだろう。日本のアニメ文化における定型で

あり、メディアのなかに広く浸透した「戦闘美少女」のイメージと響き合いながら、彼女たちは「戦争」の物語というステージに立たされるのだ。

AKBの場合は、「シングル選抜総選挙」というシステムによって闘争のコンセプトが鮮明化している。したがって、アイドルの側からの発話としては、たとえば指原莉乃『逆転力』には、「戦う」「負ける」「負けない」という語が頻出しているし、高橋みなみ『リーダー論』では、「己のために」と「チームのために」を両立して戦う論理が追求され、「人生は矛盾との戦い」といったフレーズが導かれていく。また、地下アイドルの姫乃たまは、地下アイドルの世界では「女の子同士が比べられる機会」「女の子を競わせるイベント」が多く、「もちろん女の子たちも、あくまで地下アイドルとして戦っているだけであることは恐らく理解して」いるものの、「女の子同士が競いやすい構造」になっていると述べている。多くのステージが投票制ライブの形式をとったり、オーディション自体がショーになるビジネス化の方式があつたりと、彼女たちは心身をすりへられるようなやり方で数値化され、互いに比べられ、競わされているのだ。

他方、アイドルの競い合いや闘争に関して、ファンが「一緒に戦う」ための具体的手段は、金銭と時間を費やすことである。「総選挙」にかかわるAKBの投票や競争による序列の構成について、ネオリベラリズム的なものの「ⁱⁱ権化のようなシステム」であり、資本主義の搾取が表出していると述べる濱野智史は、それゆえに、メンバーとファンを団結させるような共同性が現われるのだと指摘する。投票し、票数をのばすために金銭を注ぎ込むことに象徴されるように、ファンはアイドルのためにお金を使う。「とにかく給料をぜんぶ注ぎ込んで」ライブに行くファンや、「オタ活」に「単純に家賃と生活費以外は全部」使うというファンは、自分のもてる金銭と時間をすべて賭けて、アイドルと一緒に戦っているのだといえるだろう。

ただし、「一緒に戦う」という共同性について、構造的な観点から検証するならば、明らかな非対称性が浮上せずにはいない。新自由主義や資本主義に同じように搾取されているというとき、アイドルの側が、生身の身体や「素顔」の「私」がさらされた場で比較され、競争させられる戦いを実際に戦っていること、そして戦争の物語のステージにあつて、ファンから（ 3 ）からは、視線が逸らされ、表通りされる。つまりこの非対称性は、公然の秘密としての了解事項となる。だが、実際の現実としては、ジェンダーの非対称性を背景に、彼女たちの身体だけが、消費され搾取される公的な場所に剥き出しにされている。目を逸らすことは十分に可能だが、見ようとすれば、非対称な関係であることは瞭然としているのだ。

たとえば握手会では、「行列の長さが、そのまま人気のバロメーター」になってしまい、リアルなかたちで「人気の差」を目視できてしまう。当事者の側が「握手会って、人気为数値化されるから怖いすよね」という感覚をもつのは当然のことだろう。また、現場において、ファンの男性から「けっこう過激な接触もされ」うることは、暗黙の前提となっている。

改めて確認しておくと、地下アイドル文化を取り込んだ現代のアイドルは、グラビアアイドルの仕事も吸収している。「物販」で売られる写真には、性的な部分を強調したポルノグラフィックなイメージが盛り込まれるし、また、地下アイドル業界では、ライブで着ていた衣装や、場合によってはストッキングなどまでオークションとして売り買いされることもあるのだ。

(内藤千珠子 『「アイドルの国」の性暴力』)

* ちやわか……評論家。

問一 波線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

① コンゲン

- ア 彼はコンジヨウがある人だ
イ 何一つコンセキを残さない
ウ コンシンの場で打ち解ける
エ 新旧がコンザイする街並み

② チクセキ

- ア 難攻の地にチクジヨウする
イ ガンチクに富む文章を読む
ウ 不祥事をチクイチ報告した
エ ハチクの勢いで勝ち続ける

③ ゲンキユウ

- ア 企業のキユウヘイを改める
イ 真理をキユウメイした学者
ウ コウキユウ的な平和を願う
エ 試験でキユウダイ点を取る

④ ネットウ

- ア 仕事でトウカクを現した弟
イ 選考はシユントウに進んだ
ウ 要職に女性をトウヨウする
エ ケイトウ立てた調査を行う

⑤ ケツセツ

- ア 予防セツシユを受けておく
イ ジョウセツ展も見どころだ
ウ セツドのある暮らしを送る
エ 文章のコウセツは問わない

問一 二重傍線部 i・ii の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i モラトリアム

- ア 他とはつきり区別される独自性
- イ 目標を達成するまでの猶予期間
- ウ 可能性を秘めた未開拓の分野
- エ 法令や規則で守られる存在

ii 権化

- ア 人間でないものを人間に見立てたもの
- イ 他人の思いのままに利用されるもの
- ウ 人間の理解を超えた不思議なもの
- エ その特性が具体的な形で現れたもの

問二 空欄（ 1 ）～（ 3 ）に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

1 ア 情熱的な肯定

イ 暴力的な意図

ウ 正負の両義性

エ 一方的な嗜好

2 ア テレビに出演する存在

イ 地上で活動する存在

ウ 活動の場を失った存在

エ 選ばれた特別な存在

3 ア 性的に消費されていること

イ 家族のように見られること

ウ 才能や容姿を評価されること

エ 金銭と時間をかけられること

問四 傍線部 A「現在のアイドル文化の骨格に「地下アイドル」がある」とあるが、現在のアイドルと地下アイドルの関係について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 歌や踊りの経験に加えて、地下アイドルとして活動した経歴があれば、誰でも簡単に現在のアイドルになることができる。

イ 現在のアイドルは、地下アイドルと同じように SNS を有効に活用しながら、地下の小規模なライブハウスで活動を行っている。

ウ 現在のアイドルは、地下アイドルのライブで衝撃的で激しい応援をしていたファンを奪って「新しいカルチャー」をつくりあげた。

エ 現在のアイドルが成功したことにより、地下アイドルは「会いに行けるアイドル」というコンセプトを取り入れるようになった。

オ 現在のアイドルは、地下アイドルのもつ戦略や構造を取り入れることで変化し、その地下アイドルをも活性化する状況を生み出した。

問五 傍線部B「アイドルをめぐる磁場は更新されていった」とあるが、現代のアイドルをめぐる磁場の特徴について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア アイドルとファンは、ライブやイベントで近い距離で接することによって共同体的な感覚をわかちもつ。

イ アイドルは「握手会」などでファンと直接的に接触する必要があるため、恋愛禁止のルールを課せられている。

ウ SNSや動画の生中継を通じてアイドルの個人情報流出してしまい、ファンの間で売り買いされている。

エ ファンアイドルを「推す」ことで、親が子どもの成長を見守るような家族関係を擬似的に形成している。

オ アイドルは素人とプロの中間的存在であり、ファンはアイドルが卒業するまでを成長のプロセスとみなす。

問六 次の文は、本文中の ア ー オ のどこに入るのが適切か。記号で答えなさい。

このような「現場」で、ファンからの介入を受けるかたちで、アイドルの「素顔」が「共同演出」されるというわけだ。

問七 傍線部C「『敵』が設定された、競争と闘争の物語」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア アイドルの闘争は日本アニメ文化における定型であり、メディアに浸透した「戦闘美少女」のイメージに由来する。

イ アイドルが数値化されて競わされる構造は、国民国家が敵と味方に分かれて戦争するイメージと重なって見える。

ウ 「戦争」の物語のステージに立たされるのはアイドルだけでなく、ファンも金銭と時間を費やすことで共闘している。

エ アイドルは困難に打ち勝って成功をつかむために、メンバー同士の対立を避けてチームとして戦うことを優先する。

オ ファンがアイドルの人気を決める競争に参加して金銭と時間を搾取されてしまうことは暗黙の前提となっている。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

『柳田国男集』巻二に収められている「東国古道記」に、「加賀様の隠し路」という話がある。加賀百万石の前田氏が、江戸と領国のあいだにもついていた秘密の連絡路のことで、その道筋には一定の距離をべだて、だれが建立したかわからない薬師堂や観音堂があり、仏壇の下ひづろの塗籠ぬりかごに、食器や家具類が納めてあった。参観交替で江戸に詰めていた殿さまが、領国加賀へ逃げるときにつかうというのである。これはあまり時代劇じみた発想であるが、江戸三百年のあいだ、秘密の使者が江戸と国許を往復したことはあつたろう。そのための地理をあらかじめ調査したことぐらひは、十分にあつたはずである。この観点から地図を案じ、もつともありそうな道筋が考えられている。それによると、加賀藩に睨みをきかせている幕領の飛騨を敬遠し、警戒嚴重な北の親不知おやしらす、明路あけろの切処を避ける道となると、天正のむかし(一五八四)、佐々成政の佐良佐良越えで有名な立山連峰の佐良峠、北アルプスの針ノ木峠を越えて信州の太町に出て、そのまま北信濃を斜めに横断し、奥秩父から武蔵国にむかうルートがいちばん可能性がある。^A江戸と金沢とを脚の達者なものが急行するとすれば、これがもつともよいコースといい、これと関連して、信州や甲斐と関東、東海を結ぶ官道以外の間道について、いろいろ指摘されている。

ここであげられているような道は、いずれも表街道からはみえないかくれた道である。だが、けっして閑道ではない。近代的な交通機関が登場するまで、物陰ではいつもそれなりに忙しく、人々によって生きてつかわれてきた。たとえば、富山市の東南、常願寺の谷をさかのぼって佐良峠をこえ、いまは黒部第四ダムのために湖底に沈んだ平小屋で、黒部の谷を渡って針ノ木峠にかかる道は、ボツカ(歩荷)とよばれた荷担ぎの人たちが、越中の塩魚を信州にとどけてきた道であつた。佐々成政もやみくもに雪中この峠をこえたのではない。平素から十分に調査ずみの間道を、非常のときに利用したものであろう。本能寺の変のとき、堺にいた徳川家康が、明智方の探索の目をかわし、わずかの供廻りともまわと伊賀越えで伊勢の白子に走り、そこから舟で領国に帰つた話と同類である。

これらの捷徑とくけいは、支配者たちが政治的、軍事的支配の動脈として官道を開設し、表街道にふさわしいかたちで宿駅、伝馬の施設をつくる以前から、人々が日常生活の必要にもとづいて、自然に踏みつけた道である。だから、表の街道の設備が充実し、人間の交流と物資の流通のうち、官道に依拠する部分が多くなるにつれ、古い道筋がしだいに人々の記憶から消え、利用者の減少したのは当然のなりゆきであつた。けれども、これらは実際に消滅したのではない。交通の動脈からはなれることになった辺鄙へんぴな村々に、日常の最小限に必要な物資をとどける道として、細々とではあるが恒常的につかわれてきた。そして、ときには佐々成政の佐良佐良越えのように、支配者たちが非常用の間道として利用すると、わずかにその名が文献に記録され、歴史の表面に浮かびあがるが、ほとんど大部分は歴史の水平線下に沈み、庶民の日常を陰でささえるネットワークを構成してきた。

すでにのべたような「^B塩の道」とよばれるものなど、その重要な例である。また、これらの埋没した道は、險阻さと、表街道に面した人里のにぎわしさから離れているという点で、山伏、修験の徒が山中^{*}抖擻のため、このんで利用した。三室戸寺から上醍醐までの乞食峠の險路を、近ごろまで利用したサンドさん^{*}とよばれた人たちも、おなじく山伏の流れを汲む人たちであつたと推測される。そのため、この種の道にはしばしばこの世から隔絶したものの利用する道として、神秘的な色彩の付着することが多かった。さらには隠密、忍者、スパイの利用など、いわゆる隠し道^{*}の話題がまつわって、^a狎^{*}の眼でみられるようにもなった。しかし、その実質は、もっと着実な、庶民のかくれ日常に密着する側面を有していたことに注目する必要がある。

官設の街道のネットワークに対して、間道のその特徴は、民俗資料によるかぎり、馬よりも牛の背、さらには人の背に依存して物資が運ばれるという点にあつた。牛は馬にくらべると反芻^{はげう}類であるだけに粗食に耐え、急坂にもつよい。人間の歩けるほどの道なら、かなりの山坂でも背に荷をつけ、いつしよに歩いてくれる。馬は機動力があり、馬力はあるけれど、牛にくらべてはるかに贅沢な家畜である。^Cヨーロッパの歴史をみると、中世の農業革命とよばれるものは、十世紀、フランス中北部からドイツ西南部にかけ、大型の重量のある有輪^{あり}犁を数頭の牛や馬に^ひ牽かせて耕作する方法が確立されたことによつていた。やがてそれにつかう家畜は馬のほうが、牛にくらべて圧倒的に多くなった。

なぜそうだったかという、牛は粗食に耐え、粗悪な管理に耐えるかわりに能率はひくい。これに対して馬のほうは、よりこまやかな管理を必要とするけれども、その能率ははるかに高い。西ヨーロッパで十世紀末、十一世紀から農耕に牛をやめ、馬を多くつかうようになったのは、耕作の能率の向上したことをしめすとともに、家畜の飼育、管理方法の向上を意味するとされている。馬は牛よりはやく歩くばかりか、一日に一時間から二時間もながく働くことができる。このエネルギーのもとは飼料にある。牛は草をたべさせておけばよいが、馬にはオート麦をたべさせた。西ヨーロッパでは^{さんば}三圃式農法が確立され、春まきの穀物であるオート麦を馬にたべさせ、秋まきの冬小麦やライ麦を人間がたべる方式ができあがるにつれ、馬を多くつかうようになった。アルプス以北のヨーロッパは、気候条件はきびしい。収穫を確保する第一の手段は、気候のよいときにすばやく畑を耕し、種をまくことであつた。上等の飼料をたべるかわりに、よりはやく、より長時間働いてくれる馬の使用は、農業生産量の増大に決定的な意味をもつていたという（飯沼二郎『農業革命論』昭和三十一年、創元社刊）。この事実は、^D日本における牛馬使役の歴史を考えるうえで、重要な参考になるだろう。

もちろん、日本の事情はヨーロッパとおなじではない。牛耕は古代以来、畿内をはじめ西日本の平野部で行なわれたが、馬耕のほうは明治まで、きわめて少なかった。その理由について、日本の在来種の馬は体形が小さく、犁をひく力が十分でなかったからとの説もあるが、ことはそれだけで

はないだろう。たとえ馬格は小さくても、支配者たちは馬牧を整備し、馬の機動力と輸送力とを重視してきた。馬を農耕につかうことが少なかったのは、農民たちが飼育の手数と飼料のことを考え、どちらにするかというとき、牛をえらんだからと思われる。それに、畜力利用の耕作には、耕地の形状が大きく関連していた。

西日本の中心的な平野部の、開発の歴史の古いところでは、古代の班田収授のための土地区画である条里制はよく施行され、畦^{あぜ}もまっ直ぐになっていて、耕地一枚の面積も大きく、むかしから畜耕も可能なたちになっていた。しかし、すこし山間にかかる状況は一変するし、とくに東日本の耕地は、明治三十二年（一八九九）に耕地整理法が公布されるまで、平野の村でも水田一枚の面積は小さく、不整形で、畦も曲りくねっていて、およそ畜力による耕作など考慮に入っていない姿をしていた。そうした地方では、牛や馬を飼っても農耕に関係する面では堆肥を踏ませるとか、せいでい収穫物を運ばせるくらいの補助的な仕事にしかつかわなかった。牛にしても馬にしても、飼育の主目的は街道における物資の輸送にあり、馬には支配者たちの騎乗用がこれに加わって、畜力と農耕との関係は、大陸諸民族のように大きくはなかった。

しかも日本は山国のため、平坦な道路はすくなく、牛馬で物資を輸送するといっても、特定の都会とその周辺以外は、近代になるまで車両の利用はほとんどみられなかった。牛や馬が荷車をひくという姿はなく、荷物は人間の背でなければ牛や馬の背につける搬送がほとんどであった。そして、この運輸方式のなかで、牛と馬のちがいがはつきりと分かれていた。^E六世紀から八世紀にかけて、最終的には律令制というかたちで古代国家の完成がなしとげられると、都から九州大宰府までの山陽道と、東へむかう東山道は、国家の東西を結ぶ動脈、官道中の官道として開設された。「駅路」と書いて「はゆまじ（早馬路）」「はいまじ」と訓^よまれ、「飛^{*}駅上奏」という表現もあった。^は駅^{まづかい}使^い（早馬使）が駅馬をつぎたて、馬の機動力、耐久力を最大限に発揮して情報伝達の手段とした。牛はこういうところではまったく役にたたない。

大宰府は中央政府にとって大陸外交の触角であつたから、山陽道を疾駆した飛駅の数も圧倒的に多かった。これに対して東山道は、東国に産する良馬の貢上の道であり、蝦夷地侵攻、東国開発の幹線であつた。『続日本紀』によると、大宝二年（七〇二）に美濃岐蘇山道が開かれ、十一年後の和銅六年（七一三）には美濃と信濃の二国の境は経路險隘、往還困難のため、吉蘇路を通じたとある。東海道は中部山岳地帯に水源をもつ水量の豊かな急流が多く、当時は下流に沼沢地が残されていて、^{*}馬^は匹^{ひつ}輸送には適さなかった。ここに古東山道を改修して恵那山の南、神御坂の峠をこえて木曾から伊那谷に出る道、さらには木曾谷をそのまま遡上する官道が、東国と都を結ぶ最大の幹線として、中央政府の手で整備されることになった（藤森栄一『古道』昭和四十一年、学生社刊）。

時代はすこし下るが、十世紀はじめに編纂された『延喜式』によると、当時、^{*}御^み牧^{ぼく}は全部で三十二、そのうち半数は信濃に所在しており、甲斐、上野、武蔵がこれにつづいている。そののち、馬

牧はしだいに東北地方にひろがり、毎年、多数の東国産の良馬が東山道を通って都に貢上された。やがて源平の争乱期に入ると、東国産の駿馬に乗った多数の騎乗兵団の西進がなされ、彼ら東国武士たちの権力として新たに鎌倉に幕府が開かれると、東日本では鎌倉を中心に放射状に街道が整備された。いざ鎌倉というとき「鉢の木」の佐野源左衛門尉常世がしたように、鎌倉にむかつて御家人たちが騎馬で馳せ参ずる道である。京都と鎌倉を結ぶ東海道に旅人の姿が増えはじめたのもこの時代であつたが、信州南部から甲州にかけて^F鎌倉街道とよばれているものは、諏訪湖の北岸と南岸から九百メートルの等高線にそつて、ひたすら南に走っている。その特徴は村落とはかならずしも関係はふかくなく、等高線をたどるので、遠まわりに迂回していても高低の差はあまり大きくない。川には橋をかけないですむよう、なるべく上流の浅瀬で徒渉するようになっているという（前掲、『古道』）。

道に高低差がすくないというのは、そこを走る馬を疲れさせないための配慮である。橋をかけないというのは、この道がつくられたころの武家の権力は、川にいくつも橋梁をかけ、平常から管理できるほどに強力ではなかったからである。やがて中世の最末期になつて、甲斐の守護であつた武田氏が戦国大名に成長すると、甲斐から南信にかけ、「信玄の棒道」とよばれるものがつくりだされた。古い鎌倉街道のような軍用道路の原則を、もつと極端に実施した道であつた。等高線にそつてうねうね迂回する道を、むかしの人は箕の手とよんだ。これに対して新たに縄張りし、真直ぐにつけられた道を縄手（畷）とよんだ。信玄の棒道は畷道の典型で、川には橋をかけ、目標へむけて直進していた。明らかに命令一下、驍勇をうたわれた甲軍の騎兵集団が、大量の馬匹に兵糧と弾薬をつけ、人馬一体となつて押し出す道であつた（前掲、『古道』）。こうした状況は、もちろん甲斐一国にかぎらない。どこの戦国大名も、戦国特有の富国強兵策を実施する以上は、大なり小なりその領国ごとに行なつていた。そして彼らの権力が、やがて織田、豊臣の政権から江戸幕府に統合されると、幕藩権力の手で五街道を中心とする全国統一の道路行政ができあがり、諸大名の参勤交替の道として、官道のネットワークが完成することになった。

（高取正男『日本的思考の原型』）

* 加賀……現在の石川県金沢市を中心とする地域。

* 佐々成政の佐良佐良越え……武将の佐々成政（一五三六―一五八八）が徳川家康に面会するために、厳冬期に佐良峠を越えたとされる出来事。

* 捷徑……近道。

* 抖擻……さまざまな欲望を払いのけるための修行。

* 飛駈……律令制度の下で、緊急の連絡用に用いられた馬使。

* 馬匹……馬のこと。

* 御牧……古代の朝廷が直轄した牧場。

問一 波線部 a・b の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選りなさい。

a 狢吝

ア 不思議なものを好むこと

イ 目新しいものを面白がること

ウ 気味の悪いものを怖れること

エ 異常なものをあさり求めること

b 馳せ参ずる

ア 急いでかけつける

イ 勇んで走ってくる

ウ 揃って姿を見せる

エ 喜んでお仕えする

問二 傍線部 A「江戸と金沢と」を結ぶ問道は、筆者の想定によれば、どのような道であったか。

次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア この問道は「加賀様の隠し路」と呼ばれ、参観交養で江戸に詰めていた加賀の殿さまが国許へ逃げるときにつかった。

イ この問道は加賀百万石の前田氏が秘密の連絡路として開設したものであり、佐々成政も佐良佐良越えの際に使用した。

ウ この問道はあらかじめ調査ずみのルートであり、江戸時代に秘密の使者が江戸と領国加賀を往復するときに利用した。

エ この問道は佐良峠や針ノ木峠を越える険しい道であり、平素から加賀藩の中でも脚の達者なものがつかつてきた。

オ この問道は表街道からはみえないかくれた道であり、朱荷たちが非常時に江戸から加賀へ物資を届けるために用いた。

問三 傍線部B「塩の道」とは、本文に先立つ個所での説明によれば、塩の購入ルートであり、海岸の塩浜と内陸の村々を直線で結んだ古い道とされる。この「塩の道」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 表街道の設備が充実すると、庶民は険阻な塩の道を使用しなくなり、この道は歴史の表舞台から姿を消した。

イ 表街道が整備されると、塩の道は庶民の日常生活から離れて、支配者たちの非常用の間道として用いられた。

ウ 表街道を庶民が用いるようになると、塩の道は物資の流通路ではなく、山伏らの修業の場として使用された。

エ 表街道が官道として開設される以前から、塩の道は庶民の日常をささえる道として使用されつづけてきた。

オ 表街道と異なり、塩の道は自然に踏みわけられた隠し道であり、庶民よりも隠密や忍者がこのんで利用した。

問四 傍線部C「ヨーロッパの歴史」における牛馬の使役について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 大型の重い有輪犁は牛では牽くことができず、それゆえ、農耕用の家畜として牛よりも馬が数多く飼育されるようになった。

イ 気候条件のきびしいアルプス以北を除いて、粗食に耐える牛ではなく、上等の飼料をたべる馬を農耕で用いるようになった。

ウ 馬にオート麦をたべさせたことにより、牛よりも馬の頭数のほうが圧倒的に多くなり、農耕にも馬をつかえるようになった。

エ すばやく畑を耕して種をまくために、より長時間働いてくれる牛よりも、機動力のある馬が農耕に利用されるようになった。

オ 家畜の飼育方法や耕作の能率が向上し、牛にくらべてはるかに飼育に手間暇のかかる馬が農耕につかわれるようになった。

問五 傍線部D「日本における牛馬使役の歴史」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 日本の在来種の馬は体格が小さく、機動力に欠けていたので、農耕に不向きであった。
- イ 西日本の中心的な平野部は畜耕が可能な土地区画であり、古代から牛耕が行なわれた。
- ウ 山間の耕地では畜力がつかえず、それゆえ、当地の農民たちは牛馬を飼育しなかった。
- エ 東日本の平野の村では水田一枚の面積が小さかったので、馬耕よりも牛耕が好まれた。
- オ 馬はその輸送力が重視されていたため、明治にいたるまで馬耕はきわめて少なかった。

問六 傍線部E「六世紀から八世紀にかけて」の東山道について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 山陽道を疾駆した馬とは異なり、東山道では馬は情報伝達的手段ではなく、蝦夷地侵攻の軍馬としてつかわれた。
- イ 都から大宰府までを結ぶ山陽道では物資の輸送に馬が利用されたが、東国と都を結ぶ東山道では牛が使用された。
- ウ 官道中の官道として中央政府によって整備された東山道は、東国産の良馬を貢上するための道として利用された。
- エ 沼沢地が多い東海道は馬匹輸送には適しておらず、馬が荷車をひくことができた東山道が東国開発の幹線となった。
- オ 東山道には平坦な道路がすくなく、特定の都会とその周辺を除いて、荷物の搬送に牛はまったく役にたたなかった。

問七 傍線部F「鎌倉街道」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 馬を疲れさせないための配慮から、鎌倉街道では川に橋梁がかけられておらず、浅瀬を渉するルートがえらばれた。
- イ 諏訪湖の周辺において鎌倉街道はうねうね迂回する道ではなく、等高線をたどってひたすら南に直進する道だった。
- ウ 鎌倉に幕府が開かれ、京都と鎌倉を結ぶ鎌倉街道が整備されると、旅人はしだいに東海道を利用しなくなっていくた。
- エ 鎌倉街道は甲斐から信州南部にかけて高低差がすくなく、馬に乗った御家人たちが通る軍用道路として使用された。
- オ 中世の最末期に甲斐の武田氏がつくりだした「信玄の棒道」と同じく、鎌倉街道もまた畷道とよばれる官道であった。